

# 対人援助学の里程標

## 2

サトウタツヤ

(立命館大学)



### 藤哉会(とうさいかい)の思い出 随伴性とは縁である

今回はモノローグ。

本稿を慶應義塾大学名誉教授・故佐藤方哉(さとうまさや)先生に捧げます。

多くの方がご存じの事故について改めて語ることはしませんが、方哉先生は2010年8月23日(月)帰宅途中、京王新宿駅での不慮の事故により急逝されました。星槎大学長を務めていらっしゃいました。所属大学も違うし直接の弟子でもないし行動分析系と認知されてない私が、どこかに追悼文を発表する機会はないと思われます。なので「対人援助学の里程標」の第二回を謹んで方哉先生の追悼にあてたいと思います。これもまた、一つの対人援助学の里程標になると信じて。

私は学部・修士課程と育児の悩み研究をして

いましたが、大学院博士課程に入ってから関連研究や心理学というシステムに疑問を抱き、アンチ本質主義の一つの可能性としての行動分析に興味をもちました。折から、春木豊先生が東京都立大学(現・首都大学東京)の学部の非常勤講師に来ていたので畏友・渡邊芳之と共に受講。博士課程1年の時(1987年)です。その後、春木先生に紹介されて行動分析学会などに参加。佐藤方哉、茨木俊夫先生その他のみなさんの知己を得ることができました。その下の世代として、小野浩一、藤健一、望月昭、長谷川芳典、坂上貴之、山本淳一、杉山尚子の諸先生、若いところでは、中島定彦、武藤崇ほかの諸先生。

佐藤方哉先生には、名前の漢字表記が似ていることを殊のほか喜んでいただき「藤哉会(とうさいかい)」を結成しました。「佐藤×哉」会です。渡邊芳之といっしょにご自宅に招かれるということもありました。ご自宅はピンクの洋館で書庫が立派だったことを覚えています。

渡邊芳之によれば、行動分析や動物実験について殆ど知らない私たちを方哉先生が慶應義塾大学の研究室見学に招いてくれたのがきっかけ。その後の酒席で若い私たちが「～はバカだ」「～の研究はひどい」という話をすると「え～バカなんだ！」「あの人もバカなの？」と大層喜んでくださり、君たち面白いので家で飲もうということになったのだ、ということらしいです(ちなみに、日本大学名誉教授・大村政男先生ともこんな感じで仲良くしてもらうようになりました)。この時いっしょにいたのが現在関西学院大学にいる中島定彦。

また、1992年、同志社大学で行われた日本心理学会の際に行われた「基礎心理学会 VS 動物心理学会のソフトボール対抗戦」に方哉先生の代わりに出場したというようなことがありました(私は両学会の会員ではありませんが、名前の似ている私を代理に指定してくれたのです)。「名前が似てるから代わりに出てきて」みたいな感じでした。京都御所で行われたソフトボール大会に出場しました。ちなみに、この時、私は京都大学霊長類研究所の松沢哲郎さんを初めて間近で見たのです。レフティでフォームが実に決まっていました。このことは後にお会いした時に本人にも確認しましたが、確かに、このソフトボール対戦に松沢さんは出ていたとのこと。

さらに、行動科学会(だったか、その前身の異常行動研究会だったか)のウィンターカンファレンスの企画を一つ任されたときに、杉山尚子さんと共に(スキーもしないのに)参加してもらったのも良い思い出です。方哉先生は若手の勝手な企画に応えてくれたわけです。

その当時、行動分析学会や関連する学会において、動物実験をやらない理論系の人間は珍しかったということもあってか、多くの人に好意的に迎えてもらったと思っています。行動分析

学会で出会った藤健一、望月昭、武藤崇、のみなさんとは、何と後に同僚になりました。望月さんは当時、愛知県心身障害者コロニーにお勤めで、「マルモネット」なんてのをやってました。当時も今も変わらないといえば変わらない。今、対人援助学会にいるのも、このエッセイを書いているのも、元をただせばこうした随伴性のなせる業なのかもしれません。随伴性？なんのこっちゃ？という人はいないと思いますが、方哉先生はスキナーを追悼して、「自覚せざる仏教徒としてのスキナー - 随伴性とは縁である」という小文を『行動分析学研究』に寄稿しています。この小文の英語タイトルは「Contingency as "en": Skinner is an unaware Buddhist」です。Contingencyの訳が随伴性というのはおかしいではないか、ということ、方哉先生と話したことがあります。その時、丁寧に色々とおっしゃっていて、詳しくは覚えていませんが、訳すときに偶という文字を入れるべきだという人も(方哉先生も含めて)多かったのだけれども、結果的に随伴性という訳語が定着した、ということでした。今、Contingencyは偶有性と訳されている分野もあります。行動分析でもこの機会に、偶有性は無理でも、偶を入れた訳語を考えてもいいのかもしれませんが。

個人的にはあと一つ、ウソについて考察した論文(人は何をウソと考えるか)が好きですね。今、雨が降っているとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。今、雨が降っていないとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。ウソについて多角的に、言語行動分析的に考察した論文で、今でも時々学生に紹介したりしています。

学恩を受けた慶應義塾大学や帝京大学の学生や院生の皆さんから見れば「ふざけんなー！」という話かもしれません。ちょっとだけ名前が

似ているからって良い気になるな！みたいな。しかし、方哉先生を始めとする多くの方々が、見ず知らずの若かった私（と渡邊芳之）に対して与えてくれたご厚情というのは決して忘れることはできないし、方哉先生を含む多くの方が、出身大学などという小さなことは無視して、色々教えてくれたことには感謝の言葉しかありません。現在の私のもとにも、突然見ず知らずの人から「複線径路・等至性モデル（TEM）について教えてください」みたいなメールが来たりしますが、決して無視する気にはなれないのは、かつて私が院生だった頃に接してくれた多くの人々のことが私を作ってくれたと思っていますからです。もちろん、私の恩師・詫摩武俊先生を中心とする東京都立大学心理学研究室のおおらかな雰囲気があったのことで、このことについて語ればまた長くなりますが、いずれにせよ、所属する大学の人からしか教えを受けてはいけない、というのでは「随伴性は縁である」の精神に反します。科学社会学という学問の中では、所属する大学以外のネットワークのことを「Invisible College（見えない大学）」という概念で表します。まさにそうした環境で自分の知りたいことを次々と最良の環境で学べたことを嬉しく懐かしく思います。立命館大学の学部ゼミ（サトゼミ）のモットーである「緩やかなネットワーク、軽やかなフットワーク」というのも、方哉先生ほかのエスプリを受けているのだと思います。

私個人のことについて言えば、心理学史や質的心理学を推進することにも同じような「Invisible College（見えない大学）」があったわけですが、本稿でそれを語ると二倍三倍になりますので、いつか機会があれば、と思います。この文章を読むみなさんが、所属機関、という狭い枠に囚われずに、様々な活動ができる環境に恵まれているならば、望外の幸せです。

次回を予告しておきます。今回はメアリー・カバール・ジョーンズ。メアリー・ポピンズみたいでリズムの良い名前です。行動療法の母、と呼ばれている人です。対人援助学の里程標の第二回で扱おうと思っていたのですが、あまりに衝撃的なニュースが飛び込んできたので、追悼文とさせていただき、メアリー・カバール・ジョーンズについては次回ということにさせていただきます。

改めて佐藤方哉先生のご冥福をお祈りいたします。

はるか西方の極楽浄土でゆっくりお休みください。時に、ナーガールジュナやヴィトゲンシュタイン、そしてもちろんスキナーと、沈黙の言葉を交わして。

#### 関連文献

佐藤方哉 1991 自覚せざる仏教徒としてのスキナー：随伴性とは縁である 行動分析学研究 5(2), 107

佐藤方哉 1996 人は何をウソと考えるか 言語, 25, 28-33.

サトウタツヤ・松原洋子・望月昭 2010 草の根『対人援助学』 パソコン通信時代の研究者と当事者の連携を振り返る 望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇 編『対人援助学の可能性 「助ける科学」の創造と展開』, 福村出版